2001 年 7 月 8 日

(財)地方自治情報センター
『地方自治コンピュータ』2001 年 9 月号巻頭言原稿

コンピュータ――それは、あなたを映す鏡です

山梨大学工学部長　伊藤　洋

ある町役場の職員のためのパソコン研修会を見学させてもらった。若い女性インストラクタが教壇で叫んでいる。「コンピュータは道具です。包丁やトンカチと同じ道具なのですから、決して緊張しないで先ずは馴（慣）れることが大切です。私と一週間、この新しい道具の使い方をしっかり勉強して、コンピュータになれましょう！！」。気合の入らない拍手がおこったがすぐに消えた。

娘ほどの年齢のインストラクタに励まされはするものの、助役や収入役は普段と違って出口に近い目立たない位置に場所を確保して、鼻の頭に存分に汗をかきながらキーボードを探している。

コンピュータが包丁や金槌と同じ道具だと言われれば気が楽になる。包丁は板前さんという名人が使っておいしい料理を作るものだし、金槌は大工さんという匠が使ってこそ鮮やかである。まして役場の職員が料理や大工仕事に期待されているわけではない。少々その使い方が未熟であっても町民や議会の輿望を裏切ることにはならない。

このインストラクタの発言が思いやりなのか、彼女の信念なのかはついに分からなかったが、コンピュータが計算や通信をする「道具」だと考えている人はたくさんいる。そして、今となって、これは間違いである。

たしかに、コンピュータやデジタルネットワークに関わってきた多くの科学者や技術者は、コンピュータを計算する「道具」、あるいは文書作成器、図形・音楽制作装置、統計データ処理器というように考えて開発してきた。が、それが完成の域に達したいま、コンピュータはそのすべてを内包して、ついに「鵺（ヌエ）」と化してしまった。それでも、スーパーコンピューターやメインフレームと呼ばれる大型コンピュータなどは、それぞれ特殊な目的と機能を主張する分「道具」としての性格を色濃く持っていた。だから住基や税務処理などは電算担当の専門職に任せていたが、パソコンやワークステーション、携帯端末にいたっては誇るべき専門性を持たないがゆえに「道具」としての性格をすっかり失ってしまった。

それでは、「道具」ではないコンピュータとは一体何なのだろうか。

1825 年、洋酒菓子サヴァランの発明者として名高い仏国のモラリストで政治家ブリア・サヴァラ

ンは『美味礼讃』という名著を出版した。そのアフォリスムに曰く。「どんなものを食べているか言ってみたまえ。君がどんな人であるか言い当てて見せよう」。これは、「禽獣（きんじゅう）は食らい、人間は食べる。教養ある人にして初めて食べ方を知る。」の後に書いてあるから、うっかり昨夜ほうとうとハンバーグとラーメンライスを食べましたなどと正直に報告するわけにはいかない。食通サヴァランともなれば食べ物でその人の品性を理解してしまうという。全く油断も隙もない。

ヌエと化したコンピュータに関わってサヴァラン流に言えば、「君が使っているパソコンのデータとインストールされているアプリケーションソフトウェアを言ってみたまえ。君がどんな人であるか言い当てて見せよう」ということになる。つまり、コンピュータをどういう目的で使っているか、あるいはいないか、その作成したデータは何でどんな品質のものなのか。それがこのコンピュータを所持する人の社会性・知性・興味関心・表現力等々を表している。つまり、コンピュータのディスプレイがそれを使う人の脳みその中身を映し出す鏡になっているのだ。だからうっかりコンピュータの電源を入れっぱなしにして手洗いに立つなどということはよほど勇気の要ることだ。まして、コンピュータが使えないというのはなかなか告白できないこと。それだけに功なり名を遂げた「偉い人」ほどコンピュータを避けて通りたくなる。

コンピュータが専門家の計算のための「道具」であった時代は過去のこと。ブロードバンドネットワーク時代のコンピュータはますます「ヌエ」となって町内・村内はもちろんのこと全国中・世界中を飛翔することになる。

道具のように見えて道具にあらざるコンピュータ。それを世界大に結んだネットワークであるインターネットがさかんに喧伝されている。このプロトコルをつかって 2003 年には電子政府が構想されている。はや行政サービスがパソコンのディスプレイ上に実現する時代が来ようとしているのだ。こうなると、男の腕まくりの家庭料理や日曜大工道具としての包丁やトンカチでは断じてない。プロの板前、飛騨の匠の腕前こそを住民は要求する。悪いことに他町村とのサービス品質の優劣もネットワークを通じて即座に分かる。地域経営と住民サービス、地方分権はこの「ヌエ」の御し方にかかっている。